

内記左近入道殿御返事

弘安五年一月一四日 六一歳

春の始めの御悦び、自他申し籠^こめ候ひ了んぬ。抑去年の来臨は曇^{どん}華^げの如し。将又夢か
幻^{まぼろし}か、疑ひいまだ晴れず候処に、今年の始め深山^{みやま}の栖^{すみか}、雪中の室え多国を経ての御
使ひ、山路をふみわけられて候にこそ、去年の事はまことなりけるや、まことなりける
やとおどろき覚へ候へ。他行の子細、越後公御房の御ふみに申し候か。恐々謹言。

正月十四日

日 蓮 花 押

内記左近入道殿御返事

追伸。御器の事は越後公御房申し候べし。御心ざしのふかき由、内房へ申させ給ひ候へ。